

特集

すぐ質問できる!

決算書の見方 &

課題発掘術

受取時に着目すべき

ポイントと基本分析

貸借対照表
(□□○年○月○日現在)

勘定科目の増減を切り口に 取引先の実態を把握しよう

取 引先にとって決算書は、1年の事業活動の成果を表した通知表のようなもの。金融機関にとっても取引先の実態把握や融資審査に欠かせない大切な書類だ。融資・渉外担当者なら、決算書の読取り・分析ノウハウは身に付けておかねばならない必須のスキルといえる。

だが昨今は、若手を中心として「決算書が読めない」という悩みをもつ担当者が増えているという。その理由は「そもそも教えてもらう機会がない」「研修はあるが、体系化されていないから身に付かない」など様々。いずれにしても、取引先の決算書を自分なりに解釈して読むのが難しく、取引先から決算書を受け取るときに冷や汗をかくこともあるという。

もちろん若手担当者は「決算書を作成することは取引先にとって大変な作業」という

ことは十分に理解しており、受け取ったら何かしら声をかけたいと思っている。だがすぐに問題点に気付くことができず、経営者に自信をもって声をかけられないのだ。

**過去2期分と比較し
ひと言声をかける**

では、どうすればよいのか。そもそも決算書を受け取ったその時点で詳細な財務分析を行うというのはベテランの担当者でも難しい。

そこでぜひ実践してほしいのが、決算書を受け取る前に最低でも前期・前々期の貸借対照表・損益計算書を用意しておき、取引先から決算書をもたらしたら数値を過去2期分と比較。増減トレンドを見て「前期に比べて○○が増えていますね」「□□が随分減りましたね」といった声かけを行うことだ。

これなら難しい分析スキル

は必要なく、経験が浅い担当者でも十分に実践できる。経営者からも、この担当者は決算書をしっかり自分で読めるのだなと感じてもらえるだろう。

経験を積んできたなら、売上に対する勘定科目の比率を算出してみたり、貸借対照表と損益計算書を連動させて資金の流れを見たりすることも有効だが、まずは主要な勘定科目に注目してその中で目立った増減を題材にし、要因をヒアリングしよう。そうすれば自然と取引先の経営課題発掘にもつながり、提案の糸口もつかめるはずだ。

どの勘定科目に注目すればよいのか、そこからどんなことが読み取れるのか、どう聞けばよいのか——そこは本特集で詳しく紹介する。ぜひ読み進めていただき、決算書に対する苦手意識を克服してほしい。